

コスタリカにおける環境配慮型のコーヒー栽培

①取組の概要

コーヒーは世界的に広く引用されており、近年の世界における生産量は700万トンを上回る。その栽培は北回帰線と南回帰線に挟まれた熱帯地方にほぼ限定されている。コーヒーの栽培地は、生物多様性が高くかつその危機が増大している地域、いわゆる生物多様性ホットスポットと大きく重複している。

コーヒーノキは樹高3m程度の低木であり、上層に日陰を作る木を植えて栽培することが多い。かつて、中南米のコーヒー栽培は自然林の林床で、上層木を残した状態で行われていた。しかし、近年は生産効率を高めるための大規模なコーヒー農園（プランテーション）が見られ、効率化のためにコーヒーノキを生垣状に単植するやり方に切り替わっていった。また、栽培したコーヒーの果実を加工して種子（コーヒー豆）を取り出す際に大量の水を使い、環境負荷が大きいとの指摘もある。

これらの環境負荷に対して、伝統的なやり方でコーヒーを栽培して生物多様性の保全、水質汚濁などの環境負荷の低減を図るための取組が各地でなされている。近年、環境に配慮したやり方である日陰栽培農法（シェードグロウン）が評価されている。これは自然林を残して、または森林を再生して、その日陰を利用して林床でコーヒーを栽培するもので、そのコーヒー園は、鳥類をはじめとするさまざまな動植物の生息地として価値を持つ。分断された森林の間に日陰栽培農法のための森林を再生することにより、緑の回廊としての機能も期待される。

日陰栽培農法によるコーヒーの栽培の取組は、土地を持続的に使う方法として広く普及し、生物多様性保全に貢献しつつ、コーヒー生産者の収入も安定することを目指して、NGOや企業の後押しにより進められてきた。自然林をなるべく残して本来の自然環境、植生をなるべく損なわずにコーヒーを栽培し、加工時に出る果肉を多く含んだ水の処理を行って水環境への負荷をなるべく抑え、また環境配慮された生産物に対して安定的な需要を作り出す仕組みができつつある。日陰栽培農法のコーヒー園における鳥類リストが作成されているが、ここに生息する鳥類はアメリカムシクイ科を始めとする森林性の種が多く、世界最大のコーヒーの消費国であるアメリカ合衆国で繁殖し、非繁殖期に中南米に渡る種が多く含まれている。

さらに、1990年代以降の動きとして、高品質であることを売り物に差別化を図るため、更に特定の農園の名前を冠したコーヒー豆も増えつつあり、近年ではそのような特定の農園からの豆のみのもや通常よりも現地での選別を厳しくしたハイクラス品のことをスペシャルティ・コーヒーと称する差別化が普及しつつある。

②コスタリカでの取組

国際的な自然保護団体であるコンサベーション・インターナショナルは、2003年よりコスタリカの南部のサン・イシドロ溪谷でコンサベーション・コーヒー・プロジェクト（CRCCP）を開始した。2004年からは、数十km離れたコスタリカ南部のチリボ国立公園とラ・アミスタッド生物保護圏にまたがるコトブルス溪谷でも取り組みを始めている。

これらの地域は希少な鳥類、哺乳類などの生息地となっている。ラ・アミスタッドは、中央アメリカで最大の雲霧林を有しており、アメリカバクやジャガーなど絶滅が危惧され

ている動物の生息地でもある。対象地域の再植林と保全に努め、これらの生物種や他の絶滅の危機に瀕した生物を保全するために、新しい生息地の形成が行われている。

参考文献

コンサベーション・コーヒー・プログラム（コスタリカの事例）

<http://www.conservation.or.jp/Programs/coffee/CostaRicaConservationCoffee.pdf>

スターバックスコーヒー／フェアトレード認証や環境保全コーヒー

<http://www.starbucks.co.jp/coffeecsr/certifiedcoffee.html>

Rainforest Alliance / Sustainable Agriculture

<http://www.rainforest-alliance.org/agriculture.cfm?id=main>

社団法人全日本コーヒー協会ホームページ

<http://coffee.ajca.or.jp/data/data07.html>